

技術者の班ということでノルマはよく、ここでは黒パンも六百グラムほどの大きなものをもらいました。収容所の一角にバザールがあり、二〇〇%の作業ノルマをあげると現金が支給され、バザールでたばこや甘味品を買うことができました。

一九四六年の後半から民主運動が始まりました。若い元氣な者が選抜されて、共産党の勉強をするためにハバロフスクに派遣されました。彼らが帰ってくると共産党の歴史を学ばせられ、作業の後には収容所の庭でインターナショナルの歌を歌わせられました。アクチブたちは、作業ノルマを上げ、民主運動をより早くマスタ―した班からダモイだと叫びました。班員たちは一日も早く帰国するために、疲れた体にむち打って共産党史の勉強に励んでいたのです。

そのころから、全体的に給与がよくなったと思います。収容所内に文化部が結成され、音楽や歌を聞かされるようになったのもこのころではなかったかと思えます。

昭和二十三年八月中旬、ぼくたちの班から優秀労働

者がダモイということで、ライチハの駅からナホトカへ向かいました。すでに引揚船は港に入っていました。ここで使役のために何人か残るように言われました。だれも申し出る者がいません。私は進んで残ることを申し出ました。一週間、パン工場からメリケン粉を運ぶ作業につきました。幸い次の引揚船が入港したので、私は一週間おくれで舞鶴に上陸することができたのです。

ブレーヤ収容所での石切り作業のつらさは、今でも忘れることができません。しかしそのときのつらさが、その後の私の生き方を支えてくれたのも、事実でしょう。

炭坑に明け暮れた抑留の思い出

岩手県 盛川 松雄

私たち終戦を知ったのは二十年の八月の二十八日です。それ以降、興安まで行ったのが三日ほどかかって、

興安の近くまで連れていかれて、それから徳伯斯（トボス）へ着いたのが九月の十六日という記録が残っています。徳伯斯で約一か月でそれからチチハルの近くのシヨウミントンまでまたバックして、それから十一月の四日に貨車に乗せられてソ連に入ったわけですが、このとき本国へ送還するため千五百人の大隊を編成せよという命令だったそうです。そういうことで貨車に乗せられて、多分十一月の八日ごろだと思っていますが、着いたところがチタ地区のチエルノフスカヤという炭坑の町でした。傾斜地に建てた半地下の兵舎に収容されたわけですが、そこはほとんど炭坑地帯でして、すぐ向かいがマリオトカ炭坑、それからほるかかなたに見えるのがカタランの炭坑、三キロか四キロあったと思いますけれども、トルム炭坑トホイからノーピートルムという四つの炭坑が近くにありました。

最初私も作業に行ったのがノーピートルムというところで、ホームにとまっていた貨車に野積みされていた石炭を積み込む作業。これ二人で運ぶモッコーという、私ども内地では見たことではないのですけれども、

木製の二本の棒がついた箱を乗つけたやつです。それで運んだんですけども、なかなか能率が上がるもんじゃなかったわけですが。それから今度はトルム炭坑の坑内の作業に変わりました、あのときはトロッコの入れ替え作業でした。その当時の履きものたるや旧日本軍の防蹠靴もいとこ、表面がズックのやつで、坑内へ入るとグダグダずくなっちゃって、そういうふうな防蹠靴履いていましたけれども、もう足の感覚がなくなつて、自分の足がどこにあるかわからないようなことで、恐らく線路の上さ指が乗つかったと思うですね。トロッコにひかれたですよ。足の親指何か痛かったなあと思つてあとで見たら、爪がはがれていました。それで、当時渋谷という軍医中尉が作業大隊の軍医をやっていました、大したことはないんだということで、休みはもらえなかったです。ソ連の方からもやかましく言われていたらしくて。いまだにその爪はおかしな格好になっています。そういうことで、まず痛くてどうしようもないから、休ませてもらつてそのうちに今度は編成替えになつてすぐ近くの向かいの炭坑、

マリオトカ炭坑の修理工場へ入ったわけです。修理工場の日本人のメンパーはほとんど広島県人でした。そこで檜垣とかじ屋がいたわけですが、そのかじ屋の手先やらせられて、まず一つ仕事は覚えたんですが、そのうちに今度坑内へ入るようになったんです。坑内の仕事は何をやったかというと、全部掘り尽くした切羽から機械を次の切羽へ移動する作業でした。初めて私も炭坑へ入ったわけですけども、二本の坑道の中を奥からずうっと貫通して行ってガラーンと坑道みたいに広くなっちゃいます。高さが三メートルぐらいあると思いますけれども、全部坑木で支えながらガラーンと掘っちゃうわけです。最後に機械を全部運び出すと、その坑木へ発破をかけてガシャンと落とすわけですが、その発破かける前の上からの圧力がすごいもんですね。直径三十センチもある坑木がバリバリと音をたてて裂けてくるんです。その間を命がけで避けて、大きな機械を移動させるわけですが、そういうこともやりました。そういうことが二十三年の夏ごろまで続きましたけれども、それから今度帰るんだということでは

ナホトカまで来たんですけれども、浜辺でちよつと一服させられただけです。戻って、ウラジオストックへ電力を送る大きな火力発電所のあるところ、アルチョムグレースというところまで戻りました。そこで火力発電所の増設工事だったと思いますけれども、冷却水を溜める溜池の工事でした、あそこは。計画で、その掘削やら、それから近くの山さ行って採石やら、それからその辺の社宅とか住宅をつくるためのプロックづくりとか、それから冬になると山さ行って伐採ということをして、二十四年の春ごろまで続けました。

二十四年の夏になってからいよいよ帰るところでナホトカへ来ましたけれども、港の見えるところで採石、ここでも採石現場へ行って働きましたけれども、物すごい深い井戸みたいなのを山さ掘って、火薬詰め込んで発破をかけて山を壊してというような、見たこともないことをやってきました。四年間、あしかけ五年ですか、この間いろんなことをやってきましたけれども、その間に収容所では民主化運動と称して共産党の教育が始まったわけです。私ども若かったので、ま

ず第一に上級幹部あるいは古兵に対する反感というよ
うな形までたきつけられたような格好で、一番先に乗
り出したのは私たち初年兵クラスだったと思いますけ
れども、まず朱に交われば赤くなるで一番染まりやす
い私ども、若い者は一生懸命やっただと思えます。とに
かくこの間、日の長かったという日はほとんどなかっ
たような記憶があります。

二十四年の七月帰ってきました。

ある炭坑の思い出

岩手県 高橋 信男

入ッして俘虜生活の第一歩を踏み出した土地、それ
は名も知れぬハルボンという小落であった。時は昭和
二十年十月末ころである。私は一八一部隊、武装解除
後、興安に集結し、そこから患者護送してチチハル病
院に行き、その病院部隊と一緒に入ッしたのである。
収容所へ入って、すぐ発疹チフスにかかり、二週間ほ

ど四十度の高熱にうなされ、同僚から、もう助からな
いだろうとうわさされるほどだったそうだが、奇蹟的
に命をとりとめた。その発疹チフスが蔓延し、八百人
のうち二百人くらいが罹病し、死亡者が多数にのぼっ
た。しかしその後のソ連の本腰入りのシラミ退治、
熱気消毒が功を奏して、病気も下火になり、衛生兵で
あった私の病院勤務も終わり、本格的な外の作業に移
った。ここでの作業は、道路、建築、炭坑であった。
この中で炭坑の作業が一番つらく、だれもがいやがっ
ていたが、これは本人の意志にかかわらず、のがれる
ことができない。それがついに私に回ってきたのであ
る。半ばあきらめながら、炭坑組の仲間と、汽車に揺
られて、作業に出た。この炭坑は規模が小さく、地下
にエレベータで降りた記憶がない。何でも斜坑を歩い
て地下へ入ったことを覚えている。地下何メートルあ
るだろうか、実に狭い坑道である。それに帰りは、入
ったときと違い地形は変わっている。オヤ、変だなあ
と不思議に思うほどまた狭くなっている。腰を曲げ、
身をよじって出てこなければならなかった。設備も満